

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告 I

1997年度

1998年3月

新湊市教育委員会

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告 I

1997年度

1998年3月

新湊市教育委員会

序

新湊市は天然の良港である放生津潟を擁し、縦横に走る河川によって周辺の地域と結ばれ、その水の利を活かし、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

鎌倉時代には越中守護所がおかれ、また室町將軍足利義材が滞在するなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えました。往時の活発な人々の交流、物資の運搬などその賑わいが偲ばれます。

先人が残した歴史・文化・風土は、現代に生きる私たちが未来に引き継ぐ貴重な財産です。市内に残る遺跡も、地域に根ざした歴史を語る財産であり、郷土資料の一つと言えるでしょう。

今年度から、市内の遺跡地図を整備し、また開発行為との事前調整に役立てるため、市内遺跡の分布調査を実施することになりました。

この報告書には不備な点も多々あると思いますが、より多くの人に活用され、文化財保護の一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたが、地元の方々をはじめ多くなご協力とご援助をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

新湊市教育委員会

教育長 糸岡栄吾

例 言

- 1 本書は、新潟市教育委員会が国庫補助をうけて5か年計画で実施している、遺跡詳細分布調査の初年度（1997年度）の調査報告書である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室の指導および協力を得て、新潟市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、新潟市塙原地区（一部除く）を対象とした。
- 4 調査参加者は下記のとおりである。（敬省略 五十音順）
（現地調査）
磯村愛子 岡田一広 小幡鮎子 梶田彌友美 高橋泰生 遠野いずみ 戸塚暢宏 西村倫子 貢井美鈴
早川さやか 廣瀬直樹 真井田宏彰 山崎雅恵（以上富山大学考古学研究室）
- 5 本書の作成は、下記の協力をうけて新潟市教育委員会文化財保護主事 宗 瞳子が行った。
（室内整理）（敬省略 五十音順）
荒木慎也 磯村愛子 岡田一広 佐々木亮二 砂山普司 遠野いずみ 貢井美鈴 真井田宏彰 渡辺 樹
(以上富山大学考古学研究室)
楠井悦子 西島美幸 前田三津子
- 6 今回掲載した遺物の中には、この調査以前に新潟考古歴史サークルが分布調査を実施し、採集した遺物が含まれている。
また、その際の採集遺物について一部久々忠義氏の実測図を借用させていただいた。深くお礼申し上げる。
- 7 本書の作成及び遺物写真撮影にあたっては、富山県埋蔵文化財センターの諸氏及び山崎為雄氏には貴重なご教示・ご指導をいただいた。
記して謝意を表したい。
- 8 新潟市立南部中学校郷土歴史クラブの採集遺物については、新潟市立南部中学校で保管されていたものを、新潟市教育委員会がこれ以前に譲り受けたものである。貴重な資料を提供していただき厚く感謝申し上げる。
- 9 新潟市片山の吉久 登氏にはその所蔵遺物を借用することに快諾をいただいた。厚く感謝申し上げる。
- 10 採集遺物、記録図面等は新潟市教育委員会が一括して保管している。
- 11 本書の図面・写真図版の表示は下記のとおりである。
 - (1) 第4図の凡例は次による。
 - 埋蔵文化財包蔵地
 - 織文時代遺物
 - 弥生・古墳時代遺物
 - ▲ 古代遺物
 - ▼ 中世遺物
 - 近世以降遺物
 - (2) 遺物実測中のスクリーントーンの貼り込みは次のとおり表現した。

赤彩	須恵器	珠洲焼
----	-----	-----

目 次

序 文

例 言

目 次

Iはじめに	1
1 新湊市の地勢と環境	1
2 調査の目的と方法	1
3 1997年度調査区概要	3
II調査の概要	5
1 遺跡と採集遺物	5
(1) 古宮遺跡(周知)	5
(2) 宮袋B遺跡(周知)	5
(3) 川口地先遺跡(周知)	5
(4) 上牧野宮袋遺跡(周知)	5
(5) 松木七口遺跡(周知)	5
(6) 中曾根西遺跡(周知・名称変更)	6
(7) 松木遺跡(周知)	6
(8) 朴木C遺跡(周知・拡充)	6
(9) 朴木A遺跡(周知)	6
(10) 松木中庭遺跡(周知・拡充)	7
(11) 松木大ノ田遺跡(周知)	7
(12) 寺塚原遺跡(周知・拡充)	7
(13) 寺塚原西遺跡(新)	7
(14) 版東遺跡(新)	8
(15) 沖塚原遺跡(周知・拡充)	8
(16) 沖塚原東A遺跡(周知・拡充)	8
(17) 沖塚原東B遺跡(周知・拡充)	8
2 個人所蔵等資料について	9
(1) 個人所蔵資料について	9
(2) 新湊市立新湊南部中学校 郷土クラブ資料について	9
2 遺物の散布状態	11
(1) 繩文時代の遺物散布状況	11
(2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況	11
(3) 古代の遺物散布状況	11
(4) 中世の遺物散布状況	11
(5) 近世以降の遺物散布状況	12
(6) 小結	12

図面目次

第1図 新湊市位置図	
第2図 調査地区割り図(1/5万)	
第3図 A地区概要図(1/5万)	
第4図 A地区遺跡地図(1/1万5千)	
第5図 遺物実測図 採集遺物(1/3)	
第6図 " (1/3)	
第7図 " (1/3)	
第8図 " (1/3)	
第9図 " (1/3)	
第10図 遺物実測図 個人所蔵等遺物(1/3)	
第11図 繩文時代の遺物散布状況(1/2万)	
第12図 弥生・古墳時代の遺物散布状況(1/2万)	
第13図 古代の遺物散布状況(1/2万)	
第14図 中世の遺物散布状況(1/2万)	
第15図 近世以降の遺物散布状況(1/2万)	

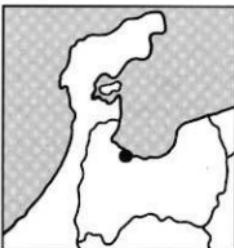
写真図版

図版1 航空写真	
図版2 調査風景	
図版3 遺跡遠景	
図版4 遺跡遠景	
図版5 遺跡遠景	
図版6 遺物写真(1/3)	
図版7 遺物写真(1/3)	
図版8 遺物写真(1/3)	
図版9 遺物写真(1/2)	

I はじめに

1 新湊市の地勢と環境

新湊市は、富山平野を南北に分ける貝羽山丘陵の西側に位置する。富山湾へ注ぐ庄川の、最下流東岸に広がる低湿地を中心にその市域を形成している。東西11.25km、南北6.74kmと東西に長い市である。人口は約3万9千人で、現在の主な産業にはアルミ加工を中心とした、地場産業である製材業及び漁業などがある。



射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、現在富山新港となっている、かつての放生津潟があった。放生津潟は绳文時代前期の糸文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴い次第に陸地化し、**第1図 新湊市位置図**庄川・和田川・下条川・鍛治川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していく。氾濫流路間につくられたこの自然堤防護などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

古代には高岡市伏木に国衙が置かれ、近くには亘理湊が設けられた。しかし、気候の寒冷化に伴う海水面の低下によりその機能が低下したため、現在の新湊市街地である放生津にその機能が移されたと考えられている。鎌倉時代中頃には、放生津の地名が現れるようになる。中世の放生津は越中の守護所が置かれるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

往時は三角州の末端のように低湿で、特に潟の周辺は水郷の低湿地であったという。低湿地の多くが水田に利用され、縱横に水路が走り、タズルやイクリと呼ばれる舟の交通路ともなっていた。橋架用と水路の岸崩れ防止に植えられたトネリコ並木が、水郷地帯ならではの独特の景観をかもし出していたが、昭和30年代から40年代にかけてすすめられた富山新港設置や場整備などにより、溝田解消の努力が重ねられ、周辺の景観は一変した。

2 調査の目的と方法

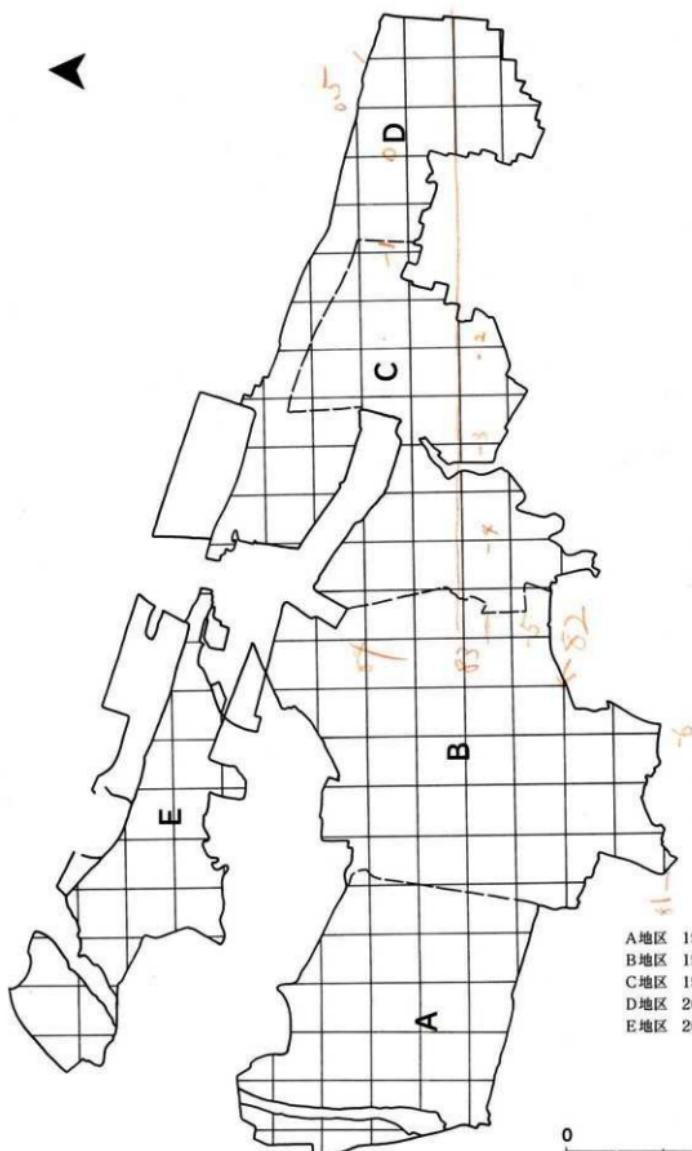
新湊市では昭和30年代から40年代にかけて富山新港設置や場整備など大型の事業がすすめられた。これまで工事中に土器などの遺物が見付かっても注意が払われることは少なく、あるいは工事の妨げになるものとして除外されることもあった。かつては海であり、新湊市のように低湿な土地には人々は生活していなかったと考えられがちだったのだろう。

富山県が昭和47年に発行した『富山県遺跡地図』には、新湊市の遺跡は30か所記載されている。その後昭和40年代の台帳を基本として調査がすすめられ、平成5年度発行の『埋蔵文化財包蔵地図』には、39か所の遺跡が記載されている。

ここ数年、開発行為に先立ち散発的に行なう分布調査や発掘調査によって、新たに発見される遺跡や、範囲の修正が必要と思われる遺跡、中には人知れず葬られていった遺跡も少なからず存在することがわかつてきた。また、未調査地域も残されているものと思われる。

そこで、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整のため、市域全体を対象とする系統だった分布調査を実施し、遺跡地図及び台帳を充実させることとした。

調査は、新湊市が国庫補助をうけ、富山大学考古学研究室、富山県埋蔵文化財センターの指導と協力を得てすすめることとなった。市域を5つの地区に区分し、平成9年度から平成13年度まで5か年の予定で行うこととした（第2回）。順次現地踏査を実施し、その成果は年度ごとにまとめるものとする。また最終年度には、小字名などを調査するとともに市内全体をまとめた遺跡地図を発刊する予定である。



第2図 調査地区割図 (1/50,000)

3 1997年度調査地区概要

今年度の調査対象は、新潟市の南西部分に位置する塚原地区（一部除く）である。全体としてみると、射水平野北西部に広がる複合扇状地性の三角州平野といえる。標高は高い所で約5m、低いところで約1mで、新潟市域の中では、比較的高低差があるといえよう。範囲は、東西約3.0km、南北約2.5kmである。北・西侧は高岡市、南側は大島町、東側は新潟市作道地区と接する。

塚原地内の西側には庄川が流れる。現在の庄川の流れは、明治後期から大正元年にかけて行われた改修工事によるもので、それ以前は、高岡市能町付近で小矢部川と合流していた。しかしこの合流地点で度々洪水が起こったため、新たな河口を掘り、庄川と小矢部川の河口が分離されたものである。

塚原地区には、現在、川口、宮袋、松木、朴木、寺塚原、沖塚原、坂東の7集落がある。

古代には塚原地区は射水郡に含まれていたが、「和名抄」に記載される射水郡10郷のうち、川口郷は川口付近に比定する説がある。

古代末期には国衙領として川口付近を遣地とする川口保、寺塚原、沖塚原を遣地とする塚原保が成立した。現在は高岡市にある淨土真宗称念寺は、かつて寺塚原に所在し、立山開山縁起にまつわる伝承をもっている。国衙領塚原保において、国衙の命令のもと立山の管理に関わる仕事をしていたと考えられている。

また川口集落西方にある曹洞宗^{そうとうしゅう}谷昌寺は、高岡瑞龍寺第十八世住職、開雲禪師の隠居寺として知られている。開雲禪師は傑僧の誉れ高く、かつ能書家でもあり多くの村人に書を分け与えたという。



第3図 A地区概要図 (1/50,000)



第4図 A地区遺跡地図 (1/15,000)

II 調査の概要

1 遺跡と採集遺物

今回の調査対象地域の周知の遺跡は、古宮遺跡(203021：平成5年度『富山県埋蔵文化財包蔵地図』遺跡番号以下同)、宮袋B遺跡(203020)、川口地先遺跡(203022)、上牧野宮袋遺跡(203050)、松木七口遺跡(203018)、木戸口A遺跡(203016)、松木遺跡(203019)、朴木C遺跡(203047)、朴木A遺跡(203026)、松木中庭遺跡(203023)、松木大ノ山遺跡(203042)、守塚原遺跡(203037)、沖塚原遺跡(203024)、沖塚原東A遺跡(203025)、沖塚原東B遺跡(203036)、沖塚原東C遺跡(203038)がある。

その中で今回の調査により、1つの遺跡を名称変更、6つの遺跡を範囲変更、1つの遺跡を範囲・名称変更(統合)し、新たに2つの遺跡を追加した。

(1) 古宮遺跡 (第4図-1)

庄川左岸、新湊市宮袋地区と高岡市能町地区との境界に位置する遺跡で、その範囲は東西約120m、南北約260mである。昭和47年『富山県遺跡図』の台帳では、遺物包含地で須恵器、土鍬が出土したとあり、平成5年度『富山県埋蔵文化財包蔵地図』では古代の遺跡とされている。しかし現在は、工場と宅地が建ち並び、実体は不明である。

(2) 宮袋B遺跡 (第4図-2)

庄川右岸、宮袋集落の西側に位置する。遺跡の範囲は東西約220m、南北約230mで、現在は河川敷の畠となっている。一帯の小字は古村とあり、標高は約2.2mである。

これまでの調査で須恵器壺部1点、珠洲窯壺部2点が採集されている。

第5図-1は珠洲窯壺部で、叩き目の幅が細かく珠洲編年第Ⅲ期(13世紀後半) (珠洲市1989)とみられる。

(3) 川口地先遺跡 (第4図-3)

庄川左岸、新湊市宮袋地区にあり、高岡市石瀬地区との境界近くに位置する。東西約140m、南北約220mの範囲であるが、現在は工場と宅地になり実体は把握できない。

川口は古代の射水郡川口郷に比定する説もあるが、その一帯では現在、古代の遺物は不明である。昭和47年の遺跡地図では須恵器が出土したとされているが、それは珠洲の壺であるらしい。<青木他1996>今回図示していないが、その壺は個人で保管されており、珠洲編年第V期(15世紀前半)にあたる小型壺の完形品である。

(4) 上牧野宮袋遺跡 (第4図-4)

新湊市宮袋集落北東にあり、新湊市宮袋地区と高岡市上牧野地区の境界に位置する。遺跡の範囲は東西260m、南北約230mで大部分は上牧野地区に広がる。標高は約1.9mである。遺跡の南側周辺にはかつて幅約100~200mの河川が流れていると考えられている。

今回の調査では、遺跡からややはざれるが、西側で近世陶磁器7片を採集した。また、以前に珠洲、土師質土器を採集している。

(5) 松木七口遺跡 (第4図-5)

宮袋集落の東側で、高岡市との境界線付近に位置する。東西約270m、南北約150mを測る。標高は約1.5m~1.9mである。平成4年度の試掘調査により弥生時代の遺跡が確認されており、現在も水田下に眠っている。

今回の調査では近世磁器を1片採集している。また過去に須恵器壺部片などが採集されている。

また、遺跡の範囲からははずれるが、南側で珠洲壺、甕を採集した。第5図-3・4である。同じく第5図-5の対

水道室は、川口集落北側で採集した。

(6) 中曾根西遺跡（第4図-6）

旧河川跡の右岸に位置する。高岡市中曾根地区と新湊市松木地区の西側に広がる。標高は約1.5m～2.0mである。遺跡の範囲は東西160m、南北220mで高岡市へと延びる。新湊市側において平成4年度に試掘調査を実施し、弥生時代の遺構、遺物が確認されている。

これまで木戸口A遺跡と呼ばれていたが、高岡市側での分布調査により中曾根西遺跡と名称がつけられており、
<高岡市1995>同一の遺跡であることが推測されるので、今回、中曾根西遺跡に名称を変更した。

今回の調査では、遺跡内で弥生土器25片、近世磁器1片が採集されている。また、以前に須恵器、土器、珠洲などが採集されている。第5図-2は須恵器高台杯である。底径は9.0cm、胎土は密で固く焼きしまる。

(7) 松木遺跡（第4図-7）

松木地区北側にあり、一般地方道松木・鷺塚線に沿うように位置する。すぐ西側には中曾根西遺跡があり、東西約170m、南北約220mの範囲に広がる。標高は約1.5mである。

今回の調査では弥生土器片を採集した。

(8) 朴木C遺跡（第4図-8）

朴木地区西側一帯に広がり、かつての西神楽川流域に位置する。今回までの調査で遺跡は南西に広がることが推測され、その範囲は東西約500m、南北約600mとしたい。標高は約1.4m～2.5mである。北側の高岡市には、弥生時代後期から中世に至る中曾根遺跡が広がる。この朴木C遺跡も一連の微高地に跨まれたとみられ、各時代の遺物が採集される。

今回採集した遺物のうち第5図-6～第6図-51を図示した。6は小型の高杯である。古墳時代のものである。脚部は中央でやや膨らみを持ちながら開く棒状のもので、ヘラ削きが施される。また脚部内面にはしづら痕がみられる。遺跡南西の用水路跡で採集された。7は口縁断面がぐくの字形になる壺である。口径12.8cm、外面はハケ目調整が施され、うすい器壁のものである。8は弥生土器壺の底部である。内面に細かいハケ目が施される。9は上部器で幅の狭い有段状口縁をもち、横ナナ調整である。

10～26は須恵器である。10は頸部の短い壺口縁部とみられる。口縁部は丸くおさめる。11～13・15～19は杯蓋である。11は平坦な天井部をもち、外面は自然釉がかかる。12の口縁部は角張る。16～18は端部が下へ引き出され、断面が三角形を呈する。13・19は壺部が丸みをもつものである。14は杯底部で、底径は9.0cmである。20・21は杯で、口径はそれぞれ12.12.5cmである。21は酸化焰焼成とみられ赤褐色を呈する。22・23・26は壺、甕の削部である。いずれも内面は円形アテ具で、23・26の外面は格子目状のアテ具が用いられる。22の外面はカキ目調整である。

27は上部器である。口径は10.0cmである。

28・29は中国製青磁碗である。29の外面は線描の蓮弁文を施し、内底面には花文とみられる文様が施される。釉調は28は淡い緑色、29は青みを帯びた緑色を呈する。

30～44は珠洲壺・甕削部である。45～47は珠洲すり鉢である。45のおろし口は太い原体で密に施され、46はやや間隔がある。47はやや肥厚した口縁に横波状文をめぐらす。48は削前すり鉢である。

49～51は越中瀬戸皿で、いずれも灰釉がかけられる。49・51は削り出し高台をもち、50の底部は回転糸切りである。

(9) 朴木A遺跡（第4図-9）

朴木C遺跡西側、西筋主幹排水路付近に広がる。遺跡の北側部分については宅地となっており、実体は不明である。

ただし、西部主幹排水路の土手からは、弥生、古代、中世各時期にわたる遺物が表採される。遺跡の大部分は、米年度調査予定の地区にまたがっているため、詳細は米年度調査の際に検討することとする。

(10) 松木中庭遺跡（第4図-10）

松木集落東側に位置する。昔より弥生土器が散布する場所として知られていた。遺跡内南側で行なった試掘調査では、弥生時代後期の遺構・遺物が比較的良好に遺存していた。聞き取り調査などによると、遺跡の中心は遺跡北側の集落に近いところと思われる。今回までの遺物散布状況から遺跡は南側部分においてさらに東側へ広がることが推測され、その範囲を東西280m、南北380mとする。標高は、約2.6~3.1mである。

今回図示した遺物は第6図-52~56である。52は弥生土器蓋のつまみ部分である。53は珠洲すり鉢である。11縁断面がやや外側に傾く。54・55は珠洲壺である。56は越中瀬戸の皿である。内外面に褐色の鉄釉がかけられる。

(11) 松木大ノ田遺跡（第4図-11）

松木集落の南側に広がり、東側には松木中庭遺跡がある。東西220m、南北140mの範囲を測る。標高は、約3.0~3.2mである。

第7図-57~59が今回図示した遺物である。58は珠洲壺である。57・59は越中瀬戸皿である。57は内外面に褐色の鉄釉がかけられる。59は遺跡からはやはざれるが、当遺跡西側での採集品である。骨壺の蓋として利用されたとみられ、内面に南無阿彌陀佛の墨書きがある。外面は静止糸切り痕があり、墨書きもみられるが、はっきりしない。

(12) 寺塚原遺跡（第4図-12）

寺塚原集落南にあり、南側の大島町との境界線付近に位置する。現況は墓地・公園・畑であり、標高は約4.8mである。この地域は、かつての中野庄が広がっていたと推定されている。かつて寺塚原にあり、現在は高岡市大町の淨土真宗本願寺派塚原山称念寺は、立山開山縁起にまつわる伝承をもつ。同遺跡近くには、同寺跡の墓地があり、そこには安永10年（1781）の銘が入った称念寺の碑が残されている。また、寺塚原と隣接する大島町中野には、称念寺畠という小字名もある。遺跡西側においても遺物が採集されており、その範囲を広げ、その範囲は東西180m、南北120mである。

今回図示した遺物は第8図-82・83である。82は珠洲壺である。83は伊万里碗で、口径は11.0cmである。外面に草花文が描かれる。

また同遺跡外であるが、遺跡東側で大島町との境界線付近においても遺物が採集されている。散布状況がまばらであるため、遺跡内には含めないが、第8図-84~87・90を図示した。84~87は珠洲壺・甕である。90は弥生土器底部であり、約3mm以下の砂粒を含むあらい胎土のものである。外面に縱方向のはけ目がみられる。

(13) 寺塚原西遺跡（第4図-13）

今回新しく確認された遺跡である。寺塚原遺跡の西側延長上にあり、大島町との境界線付近に位置する。現況は主に畑として利用されている。標高は約5.9mである。寺塚原遺跡とともに、大島町の若杉遺跡・中野北遺跡との関連が推測される。遺跡の範囲は東西約300m、南北約300mを計る。全体に古代の須恵器が多いのが特徴である。

第7図-60~71が、今回の採集遺物である。60~67・71は須恵器である。60は平らな大井部をもつ杯蓋である。61・62は杯である。63~67・71は甕・甕である。63は内外面平行タタキ目をもつ。64は、内面は円形あて具痕、外面は格子状タタキ目のあとカキ口で調整される。65は内面は円形あて具痕、外面は平行タタキ目とカキ口が施される。66・67も内面は円形あて具が使用される。67の外面は平行タタキ口で、外面は自然釉がかかる。68~70は珠洲壺・甕である。タタキ目の幅が約2mm~2.5mmの密なものである。

(14) 坂東遺跡 (第4図-14)

今回新しく確認された遺跡である。坂東集落東側と寺塚原に広がる。その範囲は東西350m、南北320mである。標高は、約4.7~6.0mである。

遺物は集落東側の用水路付近で多く採集された。第7図72~79が今回採集し、図示した遺物である。72~76・79は珠洲壺・甕である。77は珠洲すり鉢で、おろし日は間隔があり、珠洲編年第II~III期（13世紀）にかけてのものとみられる。78は中国銭永樂通宝（初鋳年1408年）である。80は土師質土器の灯明皿で、口縁部に油痕が残る。81は伊万里窯である。外面は斜格子文、内面は3条の圓線が描かれる。

(15) 沖塚原遺跡 (第4図-15)

寺塚原遺跡は、もともと沖塚原集落にそって南北に広がる遺跡として把握されていた。今回、遺物の分布状況から従米の沖塚原遺跡の一部と、沖塚原東C遺跡の範囲を、沖塚原遺跡として拡充した。その範囲は東西510m、南北約60mである。標高は、約2.8~3.6mである。

遺物はほぼ遺跡全体に分布するが、北東部分に比較的まとまりがみられる。今回図示した遺物は、第8図-88~89・91~94である。そのうち91~94が北東付近で採集されたものである。

91は須恵器の短頸壺とみられる。88・92~94は珠洲壺・甕である。89は珠洲すり鉢で、太い原体でおろし目が密に施される。

(16) 沖塚原東A遺跡 (第4図-16)

沖塚原東A遺跡は、平成5年度『富山県埋蔵文化財包蔵地図』では、沖塚原東A、B、C遺跡の3か所として把握されている。今回、遺物の分布や内容などから、従来の沖塚原東A遺跡を南側と北側に分け、南側部分一帯を沖塚原東A遺跡として把握することとした。その範囲は東西約400m、南北約200mである。標高は約3.1~3.8mである。

全体に中世の遺物が多い。第9図-105~116が今回掲載した遺物である。105~110・112~115は珠洲甕・壺である。105は羽状タタキ目で、珠洲編年第IV期（14世紀）とみられる。110は小型壺底である。111は珠洲すり鉢で、口縁端面がほぼ水平になり、おろし日は間隔がある。珠洲編年第IV期（14世紀）である。116は中世土師質土器である。口縁部が外反するもので、煤が付着しており灯明皿として使われている。

(17) 沖塚原東B遺跡 (第4図-17)

沖塚原東B遺跡は、今回範囲を変更し従来の沖塚原東B遺跡と沖塚原東A遺跡の北側を含めて、沖塚原B遺跡として把握した。沖塚原東内に遺跡は全体に中世の遺物が多いが、沖塚原B遺跡では弥生上器なども採集される。標高は、約1.7~2.8mである。

第8図95~104・第9図117・118が今回図示した遺物である。95~96は、須恵器である。96は外面が平行タタキ目、内面に円形あて具痕をもつ。97~101・117~118は珠洲壺・甕である。100・101・118のタタキ目は綾杉状である。珠洲編年第III期（13世紀後半）とみられる。99はやや上方に引き出し、ゆるやかに外傾する円頭状のII線をもつ甕で、珠洲編年第V期（15世紀前半）とみられる。103は中世土師質土器で、口縁部がやや外反するものである。104は中国製青磁碗で、外面に線描の蓮華文をもつ。

2 個人所蔵等資料について

(1) 個人所蔵資料について

第10図201・202は新潟市片口の吉久登氏が収蔵されている土器である。

202は古宮遺跡から出土したとされる上部器上縁である。長さ7.1cm、直径4.2cm、内径1.6cm、重さ11.5gである。

古宮遺跡北側の新潟市内新渕や、高岡市牧野地区周辺からは製塙土器や漁網用の古代の土縁が出土している。当時、この周辺まで海が入り込んでいたことが推測される。

201は松木中鹿遺跡から採集されたという古墳時代の盤台である。口径9.4cm、底径11.6cm、高さ9.0cmである。脚部が外反して開き、受部は内湾してのびる小型品で、脚部には透穴が3孔穿穴される。外面及び受部内面は赤彩される。松木中鹿遺跡西側、松木集落東端付近に当時は土の盛り上がりがあり、そこからこの盤台とともに土器片10数片が採集されたとのことである。

(2) 新潟市立新潟南部中学校郷土クラブ資料について

昭和43年春から附帯46年までの約3年間、新潟市立新潟南部中学校郷土クラブでは、塚原及び作道地区から多くの土器などを採集し、その成績を冊子にまとめている。

これらは、当時着工されていた塚原地区沖塚原、朴木での新港設置に伴う西部主幹排水路工事や、作道地区高島、高木、津幡江での場整備事業の工事掘削土中に散布していた土器などを、生徒が採集して学校に持ち寄ったものである。その土器などは約千点にも及び、当時同校講師に着任した間坂儀三郎氏の指導のもと遺跡ごとに整理された。

その後遺物は新潟市立新潟南部中学校において保管されていたが、平成7年度新潟市教育委員会が譲り受けた。長い年月の間に散逸したものは多く、各々に注記されていないため出土地点が定かでないものも含まれている。しかし既に、ほ場整備など大規模な工事が行われた今となっては、その質、量ともに貴重な資料であることを鑑み、今回の調査地域出土の遺物を取り上げて遺跡理解のための一資料としたい。

以下、当時まとめられた冊子に添って記述する。

① 朴木東部地先弥生土器複合遺跡

採集地点は、朴木集落の北東、西側主幹排水路の北側一帯である。現在の朴木C遺跡内北東部にあたる。

当時の採集遺物内容をまとめると、表1のとおりである。うち、弥生土器口縁部破片には赤彩のものが含まれる。石器、石礫などは伴出遺物と記録されているが、図などがないため詳細内容は不明である。珠洲焼は室町期中心と記されている。これらの採集遺物は、地表に現れている1/3の量にすぎず、当時はまだ多くの土器片などが散布していたらしい。

遺物が採集された地点は、その後主幹排水路敷設や宅地造成により今日は面影を残さないが、当時は多量のシジミ貝の集積が確認されたなど、貝塚の存在を推測させる文句が残されている。

今回掲載した第10図-203~216がこの地区的採集遺物

遺物内訳	点数
弥生式土器	
口縁部破片	65
高杯脣部破片	10
胴部破片	337
底部破片	36
石器	1
石鐵	1
骨片	1
くるみ殻	5
珠洲焼	11

表1 朴木東部地先弥生土器複合遺跡表採遺物点数

である。203～207・209は高杯脚部である。203は、ゆるやかにハの字形に広がる脚部をもつ。脚部内面はヘラ磨きで調整され、杯部には接合のための刻み目がみられる。204・207はハの字形の脚部をもつ。205・206は柱状の脚部をもつ。209は深い碗状の杯部をもつと思われる。208は高杯の杯部で、外側に棱をなし外上方へ広がる。口径は15.0cmで、口縁外面に刻み目をもち、内外面赤彩される。211はくの字形の口縁をもつ広口壺である。口径は13.6cmである。214は口縁部が屈曲して外上方に広がる。口径は15.2cm、内外面共にハケ口調整である。210・212・213は甌の底部とみられる。いずれも煤が付着する。215は甌・216は甌の肩部から腹部にかけての部分である。215の外面には、櫛摺で波状文と、直線文が描かれる。216の外面はハケ口調整である。

② 沖塚原北部地帯弥生遺跡

採集地点は、沖塚原集落北部に広がる。現在の国道8号線と、一般地方道松木・鷲塚線との交差点付近にあたり、国道8号線を境にして北東部分と西南部分で採集されたとある。北東部分は、現在の松木中庭遺跡の南側部分に位置するが、西南部分は今日では遺物はあまり採集されない。

採集された遺物は表2のとおり記録されている。弥生時代中期の上器片が多いことに特徴があるという。これらが含まれる遺跡は、当時の地表面下30～80cmに存在するものと推測されている。

第10図-217～222がこの地区的採集遺物とされているものである。いずれも弥生時代中期の甌・甌口縁部である。

217は、口縁端部内面に2段の羽状文をもつ甌である。ハケ状具で刺突したとみられ、谷間にハケ口がみえる。外面にはハケ口が施される。218は口縁端部内面に1段の羽状文がハケ状具で施され、外面端部には刻み口が刺突される。外面は煤状炭化物が全体に付着する。219も同様で、内面に2段とみられる羽状文が、外面に刻み口が刺突される。いずれも谷間にはっきりしたハケ口がみられる。220は口縁端部に1段のハケ状具による斜線刻み口をもつ。外面とともに赤彩される。221は口縁端部内面に斜行单線文が、外面端部には刻み口が刺突されるが、外面は摩耗してはっきりしない。222は後綫をもつ口縁部に刻み口が施される。

遺物内訳	点数
弥生式土器	
口縁部破片	65
胴部破片	251
底部破片	15
石器	4
木片	2
くるみ殻	1
珠御焼	3

表2 沖塚原北部地帯弥生遺跡表採遺物点数

3 遺物の散布状況

ここでは、今回の調査地区から採集した遺物を時期別に大別し、その時代ごとの散布状況を概観して遺跡のあり方を考える資料としたい。

散布状況は、新湊市都市計画座標をもとに1辺200mの方眼を設けその傾向を示した。ただし破片数のみを統計化したものであり、個体数は明らかにしていない。

(1) 繩文時代の遺物散布状況（第1図）

縄文土器1片がある。

沖塚原東B遺跡の南西部分で採集した。小破片のため器種は不明であるが、条痕文がみられ、縄文晩期から弥生にかけてのものと思われる。胎土は3mm以下の砂粒を含んで粗く、焼成は良好で外表面は赤褐色を呈する。付近の標高は、約2.8mである。

新湊市内では現在のところ、面として存在する縄文時代の遺跡は確認されていないが、縄文土器は所々で採集あるいは出土している。気候の寒冷化に伴う放生津潟の縮小により、縄文後期末から晩期にかけて、新湊市周辺では当該期の遺跡が増えるようになる。上記の土器が採集された付近の南西一帯には、新湊市高木・荒畠遺跡、大島町北高木遺跡が広がり、縄文後期の土器が出土している。

(2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況（第12図）

弥生土器・土師器9片がある。

今回の調査では全体に調査区の北東部分に遺物が多く分布している。また今回は、遺物が採集されなかつたが、北西部分にある松木七口遺跡、中曾根西遺跡も弥生時代の遺跡である。

松木中施遺跡において、現在出土及び表採される土器は、弥生時代後期から古墳時代初期にかけてのものが多い。しかし、以前に付近で収集されていた土器には弥生時代中期からのものがあり、比較的長い期間、集落が営まれていた可能性がある。一方、朴木C遺跡にはやや時代が下る古墳時代の土器が多い。その他、沖塚原東B遺跡にも当該期の上器が散布する。

(3) 古代の遺物散布状況（第13図）

須恵器56片、土師器2片がある。

今回、古代の遺物が比較的まとまって確認されたのは、朴木C遺跡と、新たに確認された寺塚原西遺跡である。寺塚原西遺跡周辺では、南側の大島町では古代の遺跡があるが、新湊市側において、付近にそれ以前の時代の遺跡はみられない。国衙の指導による開発がすすめられた地域であったのだろうか。その他、弥生・古墳時代を主体とする松木中施遺跡、中井を主体とする沖塚原遺跡及び沖塚原東A・B遺跡、宮袋B遺跡などでも古代の遺物が採集された。全体に、古代の遺物は調査区の東側に多く散布するようである。

一方、寺塚原西遺跡を除いて、寺塚原、坂東、川口集落付近では古代以前の遺物は今回、採集されなかつた。

(4) 中世の遺物散布状況（第14図）

珠淵76片、土師質土器8片、中国製青磁6片がある。

中世になると、広い範囲に遺物の散布がみられるようになる。中世より前の時代の遺物がみられなかつた、川口、坂東、寺塚原集落近辺にもまんべんなく散布するようになり、その中でも坂東遺跡、寺塚原西遺跡では付近に比べて集中

して中世の遺物が散布した。また、各時代を通して遺物が散布する朴木C遺跡、沖塚原東A・B遺跡や沖塚原遺跡でも中世の遺物が多くみられるが、特に沖塚原地域は遺物の散布状況から、中世の性格が顕著である。

(5) 近世以降の遺物散布状況（第15図）

伊万里23片、越中瀬戸16片、瀬戸美濃系1片、近世磁器44片、近世陶器24片、貨幣2点がある。

近世になると、全域にまんべんなく遺物の散布がみられるようになる。

(6) 小結

今回の調査区を含めて、新潟市域は低湿な立地状況のもとに広がる。したがって、気候の変化による海進や海退、あるいは河川流路の変動などによる環境の変化が、人々の生活空間に大きく影響を与え、関わりをもってきたことが考えられる。

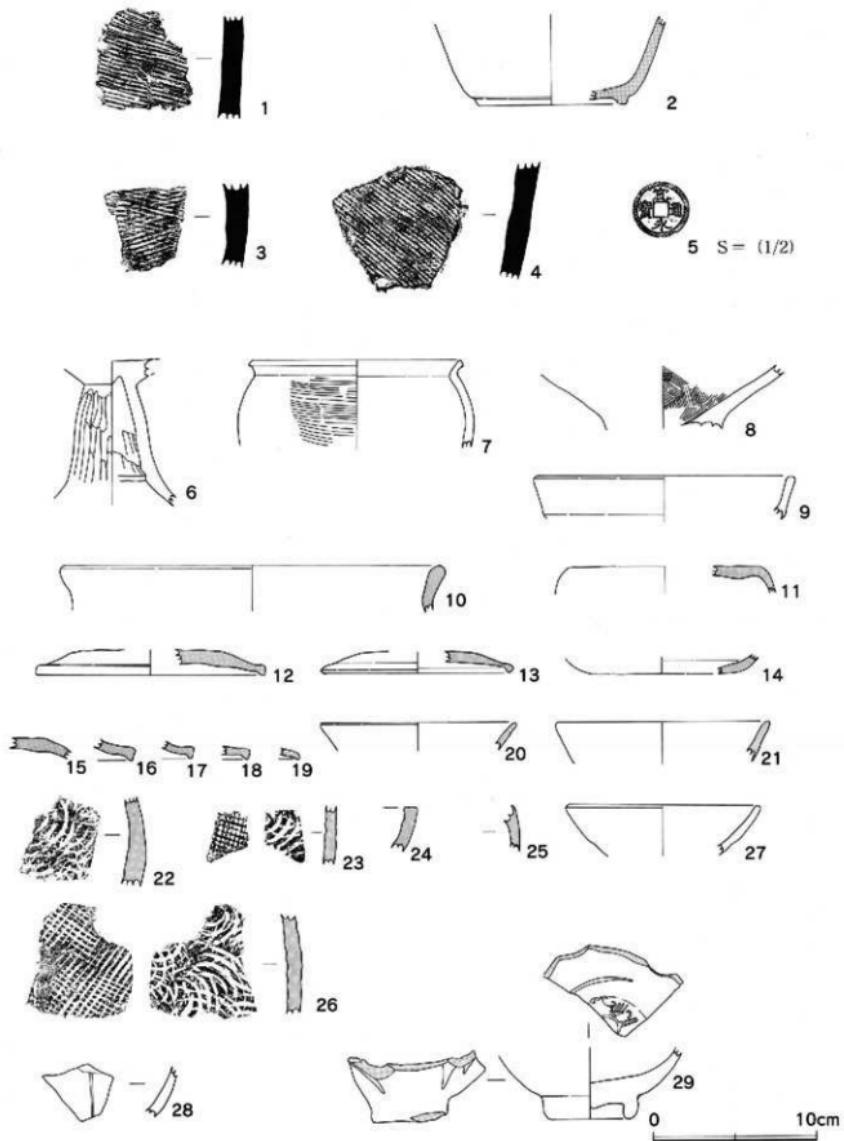
今回、庄川河川敷ではあまり遺物が採集されなかつたが、そのほかの所ではほぼ全域で各時代の遺物がのこされていた。坂東、寺塚原の近辺では、新しい遺跡が発見され、成果があった。

その中でも特に、朴木集落周辺の朴木C遺跡、沖塚原集落東側の沖塚原東A・B遺跡近辺では、弥生時代から近世にいたるまで遺物の散布が顕著にみられた。

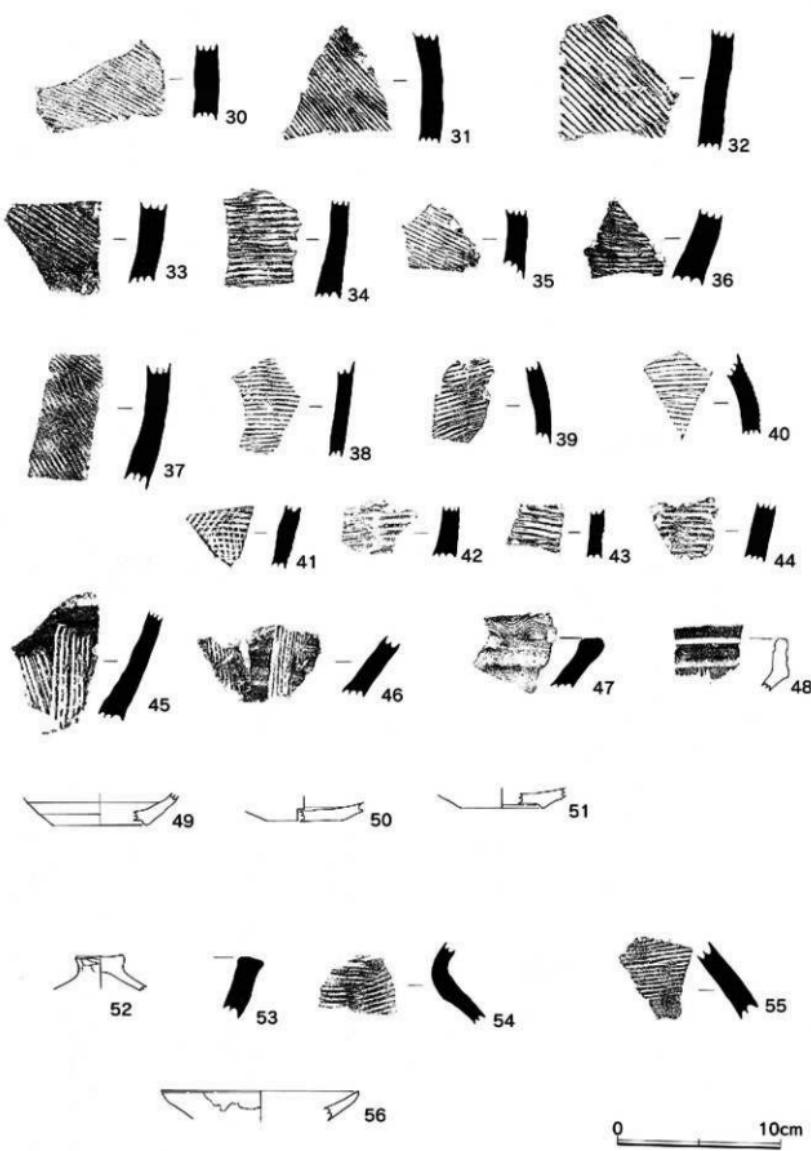
上記の遺跡に共通する環境の一つには、西神楽川の存在を考えられる。神楽川は、かつて利山川が北流し、東神楽川と西神楽川に分かれて放生津渦に流れ込んでいた川である。西神楽川は塙原地区の南東を貫流し、寺塚原、沖塚原、朴木を通り、放生津渦へと流れるルートや、隣接する作道地区的舟田、鏡宮を流れて朴木付近で合流するルートなどがあったという。また、沖塚原東B遺跡の北側周辺でも東西両方向から河川が合流し、三川と呼ばれていたということである。神楽川やその支流に沿った所には遺跡が多く立地し、この水運が古くから重要な交通路であったのではないかと既に指摘されている（久々義他1995）が、今回の調査結果でもそれが裏付けられるようである。神楽川の流れは古くから大幅には変わっておらず、その流域や合流付近である沖塚原集落東側、朴木集落付近では連続と生活が営まれてきたことが推測される。

参考文献

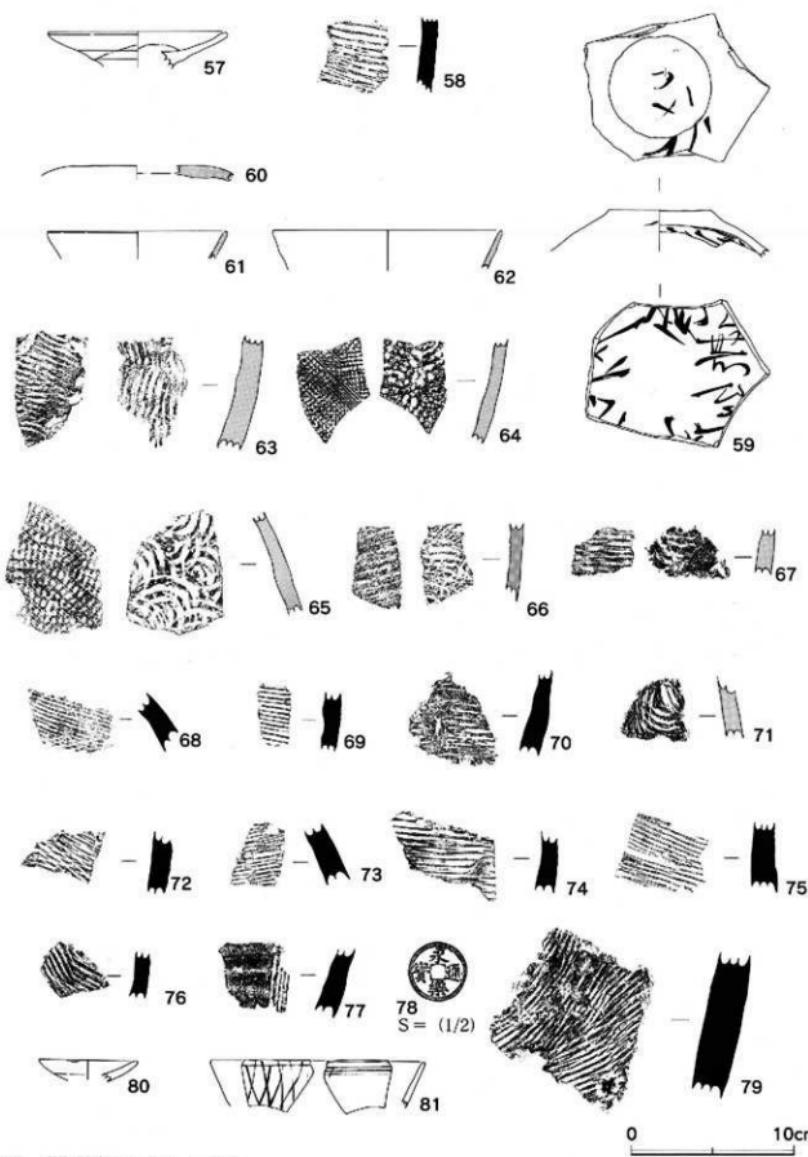
- 新潟市立塙原公民館 1986 「先人の足跡（ふるさと小学たんぼう記）」昭和60年度ふるさと発掘学習第2号
塙原小学校蔵 1908 『塙原村史料』
高岡市教育委員会 1995 『高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI』
新潟市 1964 『新潟市史』
新潟市 1992 『新潟市史 近現代』
新潟歴史編さん委員会 1997 『しんみなどの歴史』
富山県農地林務部は場整備課 1984 「付図表層地質図」「土地分類基本調査」
藤井昭二 1964 「地質からみた射水平野の形成と放生津渦の変遷」「放生津渦周辺の地学的研究」富山地学会編
高瀬保 1964 「古文書からみた放生津渦の変遷と射水平野の形成」「放生津渦周辺の地学的研究」富山地学会編
平凡社地方資料センター編 1994 「日本歴史地名大系第16富山県の地名」
富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地図」
久々義他 1995 「射水平野の遺跡・神楽川流域を探る-」「大境第16号」
青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡・古代北陸道を探る-」「大境第18号」
珠洲市立珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」



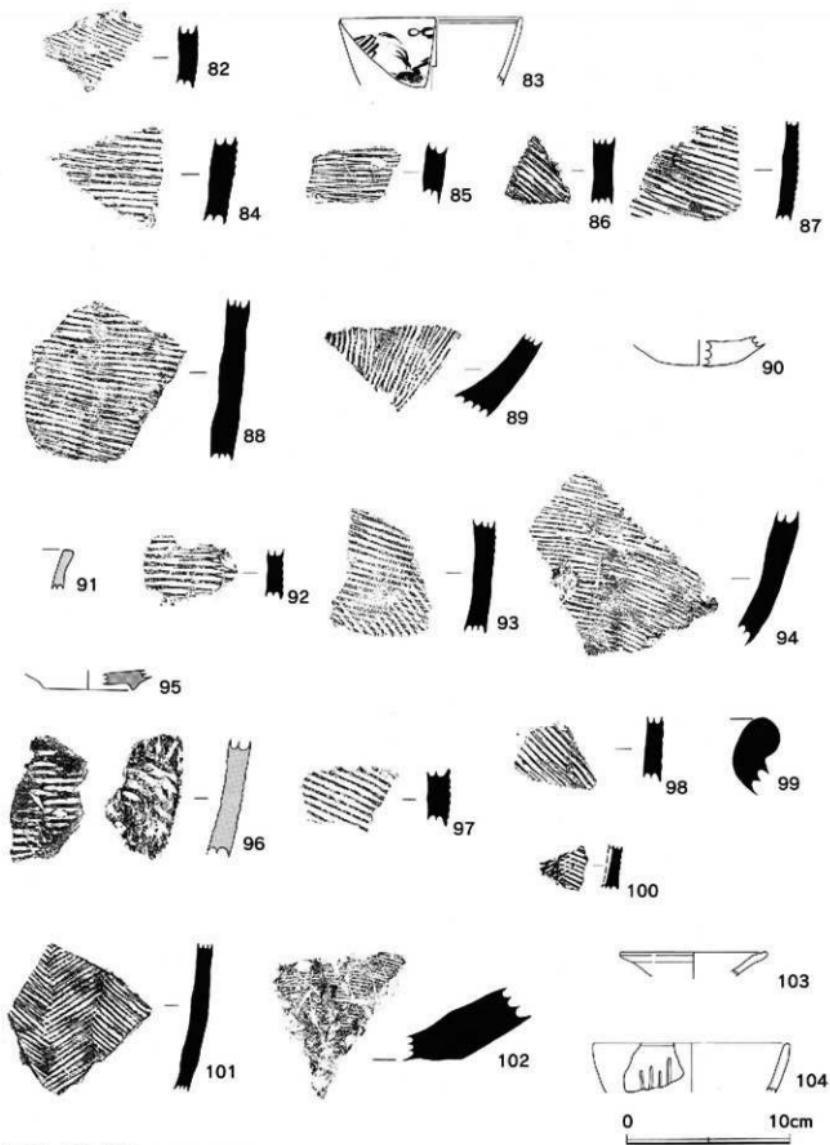
第5図 遺物実測図 (1/3) 样集遺物



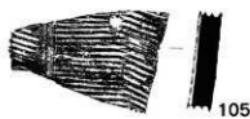
第6図 遺物実測図 (1/3) 採集遺物



第7図 遺物実測図 (1/3) 採集遺物



第8図 通物実測図 (1/3) 採集遺物



105



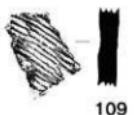
106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



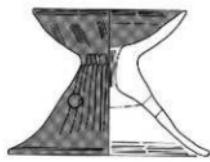
117



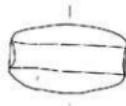
118

0 10cm

第9図 遺物実測図 (1/3) 採集遺物



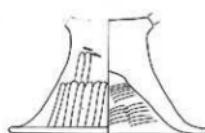
201



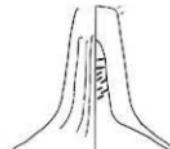
202



203



204



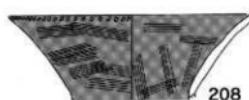
205



206



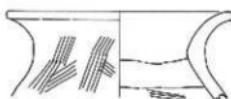
207



208



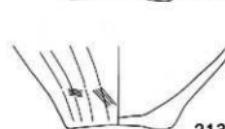
209



211



212



213



214



215



218

0 10cm



218



219



217



220



221



222

第10図 遺物実測図 (1/3) 個人所蔵等遺物

85

84

Y=83

X=-7

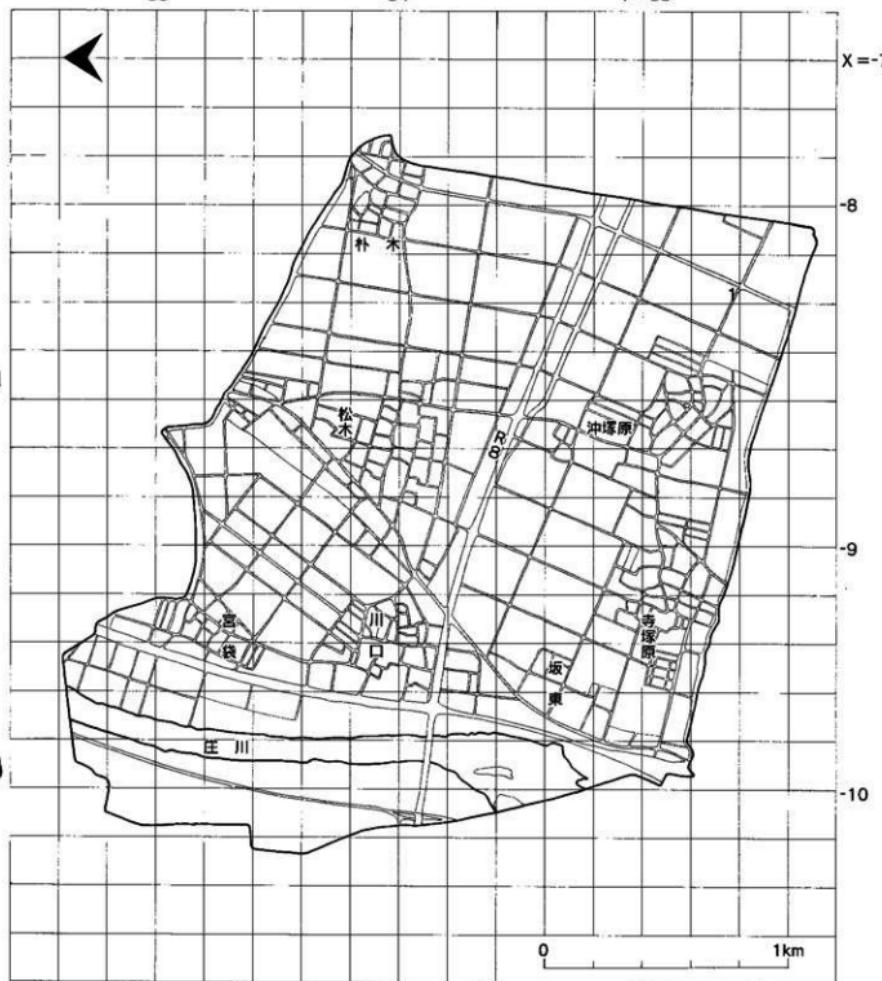
-8

-9

-10

0

1km



第11図 縄文時代の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は破片数

85

84

Y=83

X=-7

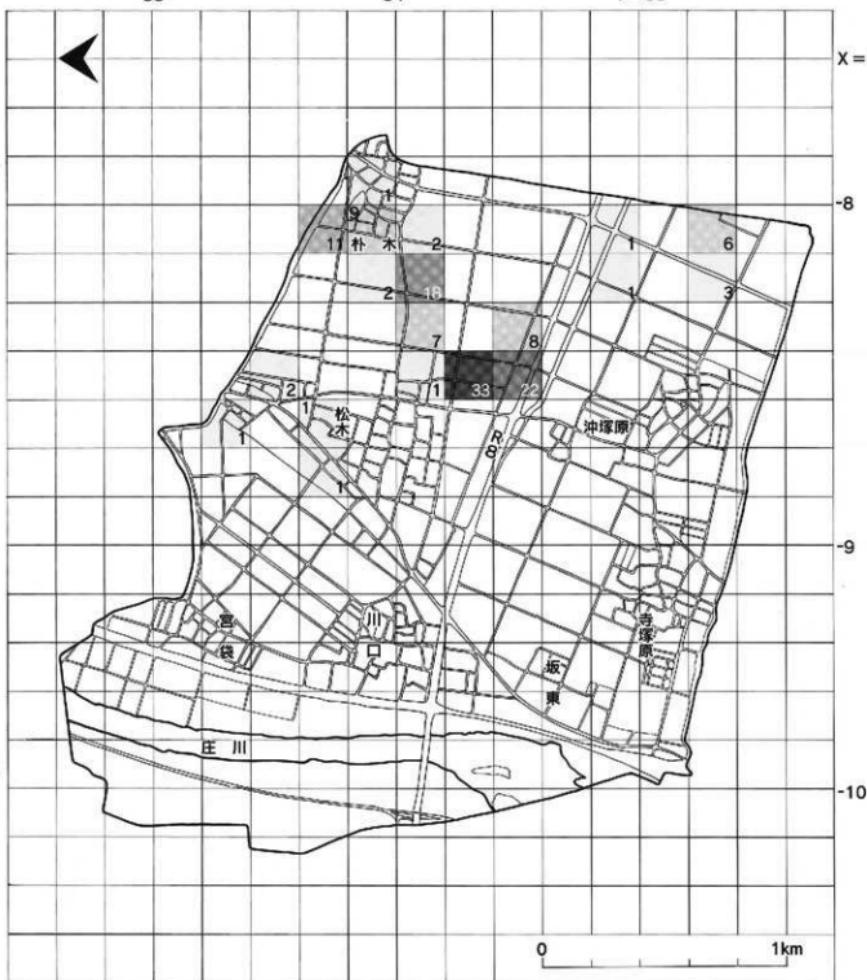
-8

-9

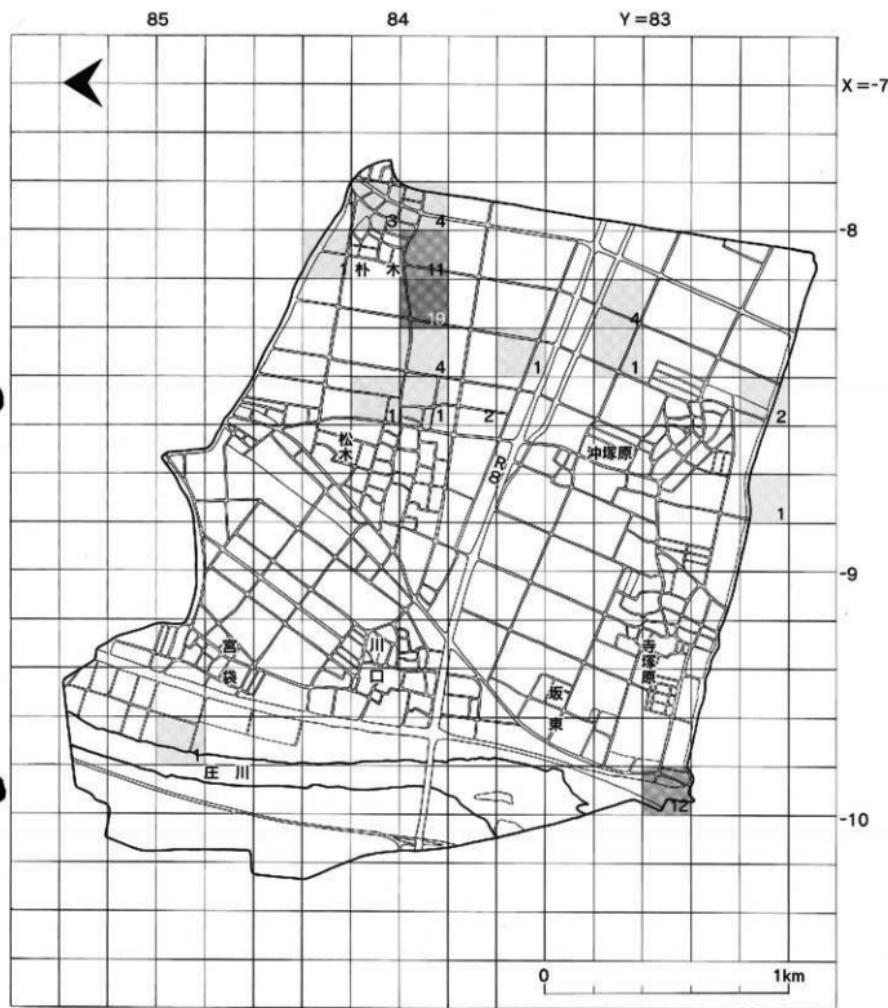
-10

0

1km



第12図 弥生・古墳時代の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は絶対数



第13図 古代の遺物散布状況 (1/20,000) 番号は破片数

X=-7

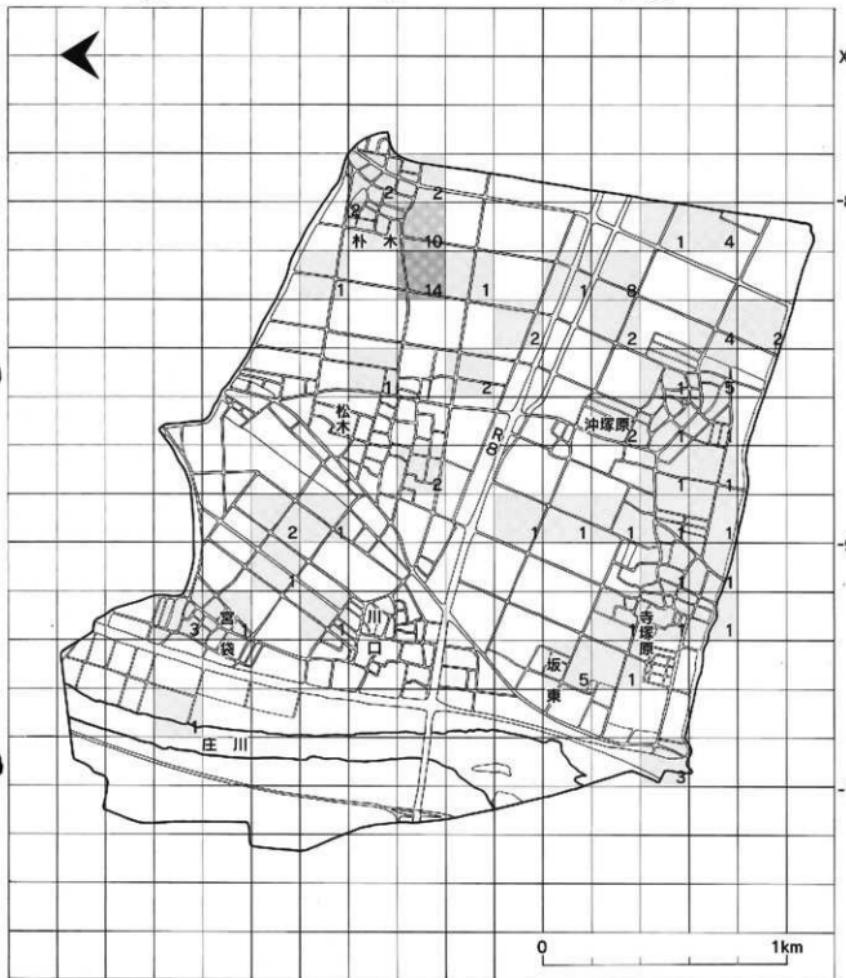
-8

-9

-10

0

1km



第14図 中世の遺物散布状況 (1/20,000) 垂数字は枚片数

85

84

Y=83

X=-7

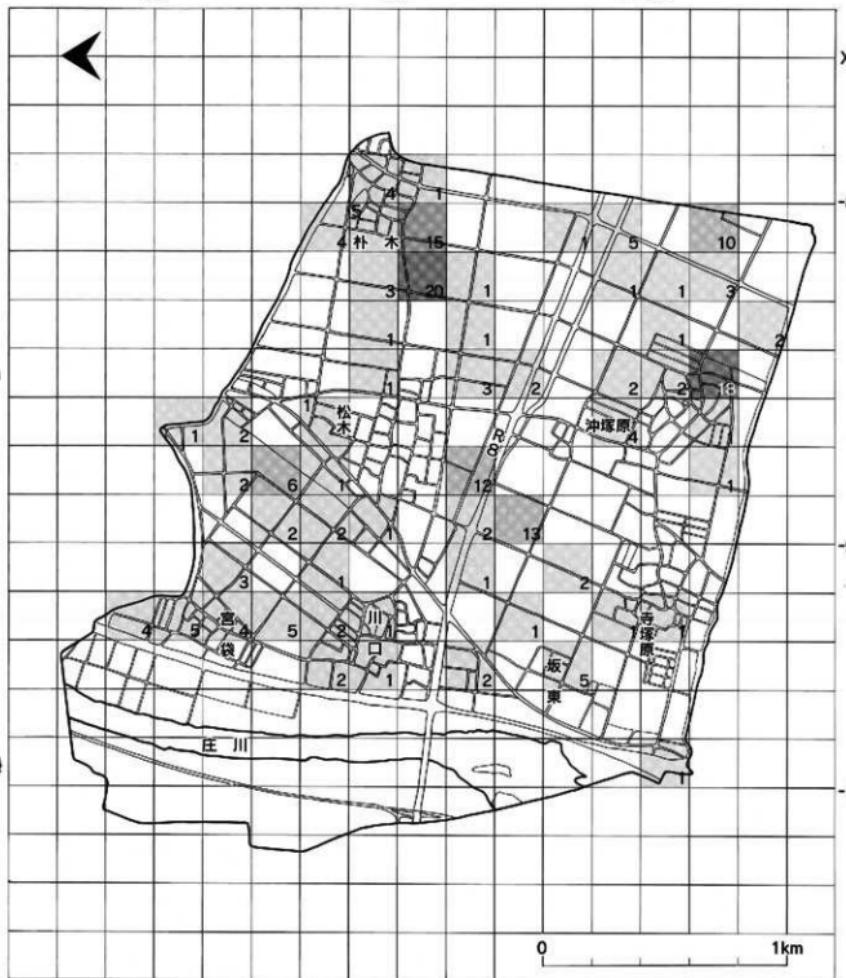
-8

-9

-10

0

1km



第15図 近世以降の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は被片数

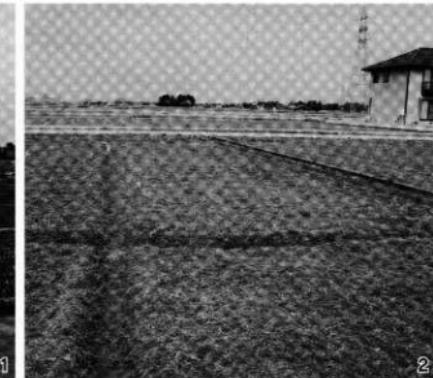


図版 1 1 A 地区航空写真 (昭和 22 年)

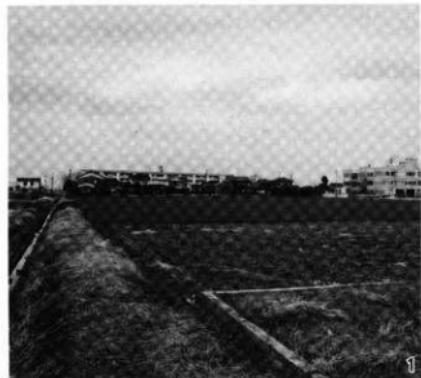
2 A 地区航空写真 (昭和 62 年)



図版2 調査風景

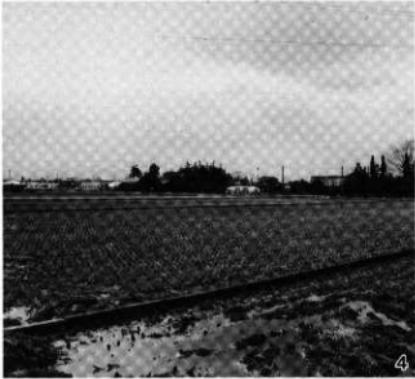


図版3 遺跡遺景 1 宮袋B遺跡（北） 2 上牧野宮袋遺跡（南） 3 松木七口遺跡（北東）
4 中曾根西遺跡（南西） 5 松木遺跡（北東） 6 松木地区石造物

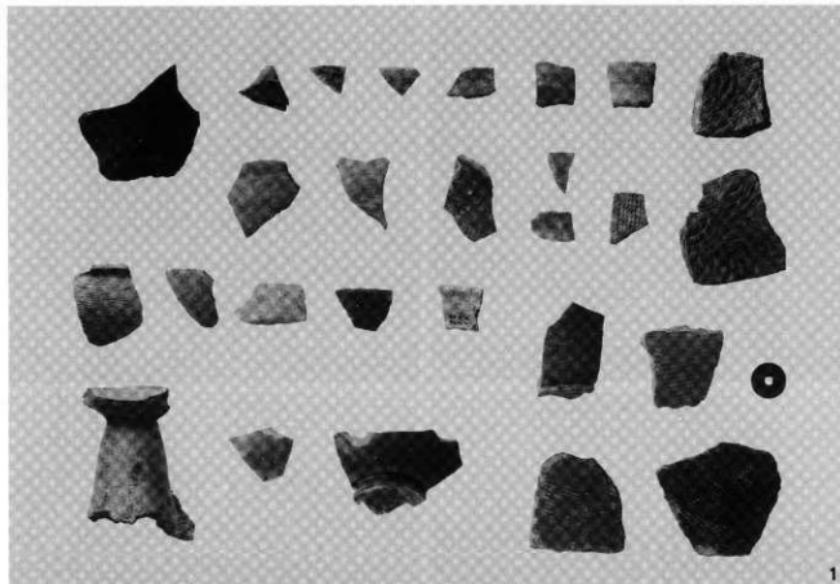


図版4 遺跡遺景 1 朴木C遺跡(南) 2 朴木A遺跡(北) 3 松木中鹿遺跡(南)

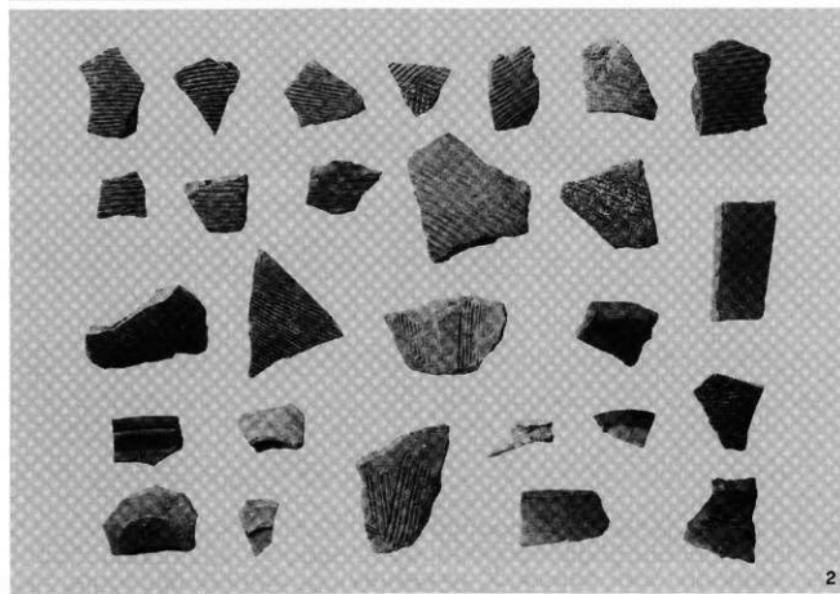
4 松木大ノ田遺跡(西) 5 寺塚原遺跡(南西) 6 寺塚原地区石造物



図版5 遺跡遺景 1 寺塚原 称念寺石碑 2 寺塚原地区石造物
4 坂東遺跡（北東） 5 沖塚原遺跡（北東） 6 沖塚原東A・B遺跡（南西）

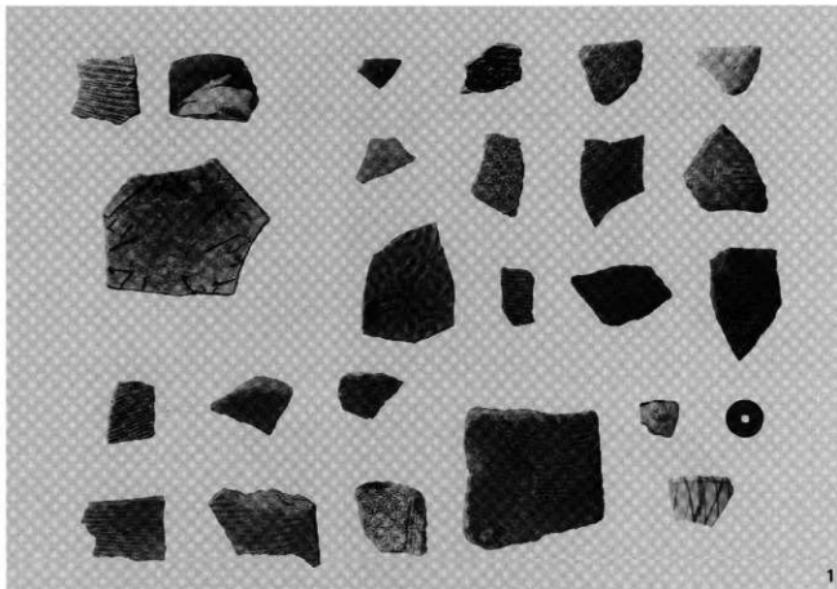


1

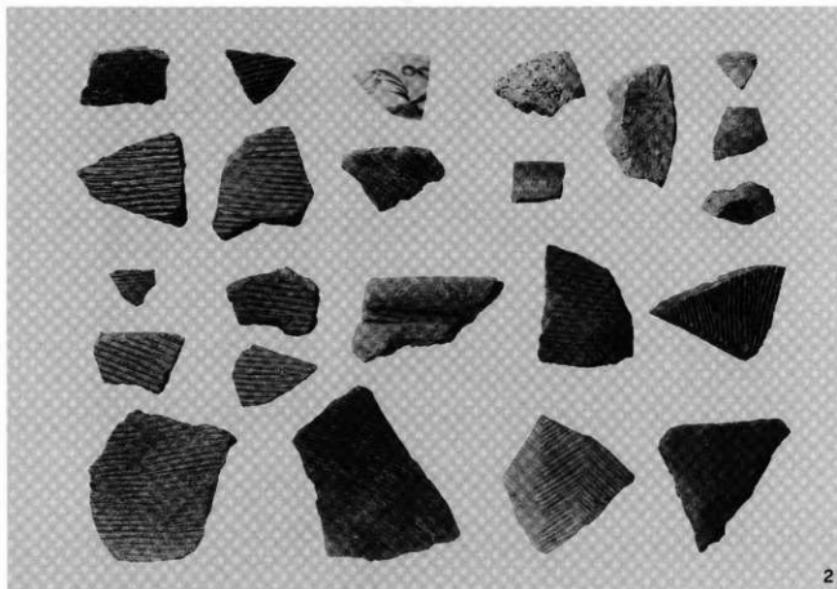


2

図版6 認物 1 第5回遺物 2 第6回遺物

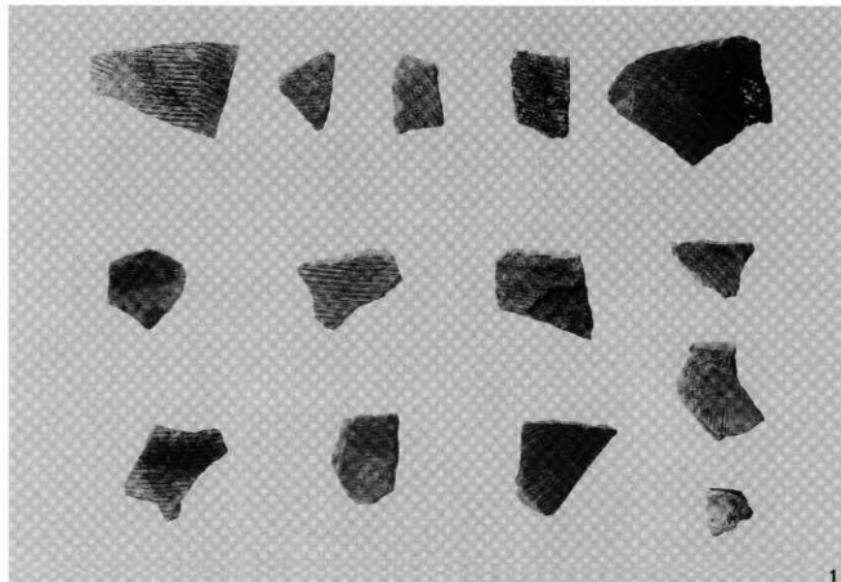


1

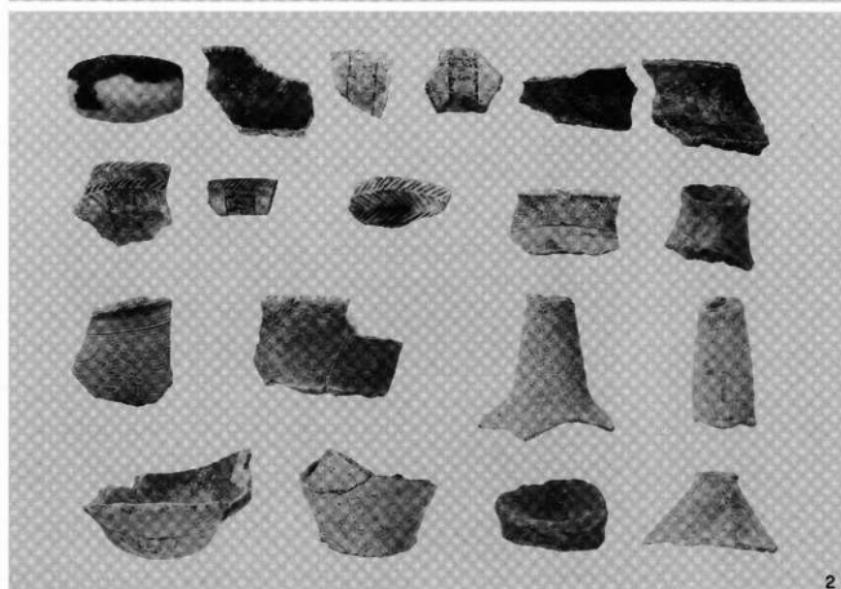


2

图版7 遗物 1 第7图遗物 2 第8图遗物



1



2

図版8 遺物 1 第9回遺物 2 第10回遺物



図版9 遺物 1 第10図-201 2 第10図-203 3 第10図-204

報告書抄録

ふりがな	とやまけん しんみなとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさほうこく!							
書名	富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ							
編著者名	宗 融子							
編集機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
市内遺跡	市町村	遺跡番号	度	度	日	日	日	日
	富山県 新湊市内	016203	-	36°47'00"	137°05'00"	19970602 19980331	-	-
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
市内遺跡	-	弥生～近世	-	弥生土器 土師器 須恵器 珠洲焼 近世陶磁器				

平成10年3月31日発行

富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

編集 新湊市教育委員会

発行 新湊市教育委員会

富山県新湊市本町二丁目10番30号

印刷 谷口印刷

